

京都府舞鶴市
によ
女布遺跡第 4 次発掘調査報告書

2020.3

舞鶴市

序

本書は令和元年10月から12月にかけて実施した女布遺跡第4次発掘調査の報告書です。

女布遺跡では、縄文時代草創期の有舌尖頭器が採集されるなど、遙か太古の縄文時代から人々の活動があったことが知られています。また、過去3次にわたる発掘調査によって、弥生時代から古墳時代、飛鳥・奈良時代の集落遺跡であることが判明しています。倉庫跡等、古代の建物群が見つかっており、舞鶴西地区の平野部において中心的な集落遺跡の一つであったと考えられ、高野地域だけでなく舞鶴の歴史を知る上で重要な遺跡です。

今回、ほ場整備事業が計画されたことから、女布遺跡の範囲と内容を確認するための試掘調査を実施したところ、古代から中世にかけて、遺跡がさらに広範囲に広がっていることが確認されました。

今後も女布遺跡のように地域の歴史が更に明らかとなることを期待するとともに、本書が皆様に広く利用され、地域の歴史文化への理解を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査を実施するにあたり、ご理解とご協力を賜りました地元自治会をはじめとする関係各位、並びに調査に参加いただきました方々のご労苦に対しまして、衷心よりお礼申し上げます。

令和2年3月

舞鶴市長 多々見 良三

例 言

1. 本書は令和元年度に舞鶴市が実施した、女布遺跡第4次発掘調査(下表)の調査報告書である。

遺跡名	所在地	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者
女布遺跡	舞鶴市字女布	範囲確認	約 120 m ²	2019 年 10 月 15 日～ 12 月 20 日	松崎健太

2. 調査は舞鶴市が主体となり実施した。調査に係る経費は舞鶴市が負担し、国と京都府の補助金の交付を受けた。
3. 調査に使用した座標は、国土地理院平面直角座標系（世界測地系）第VI系である。標高は T.P（東京湾平均海水面高）を使用した。
4. 本書に使用した土色及び出土遺物の色調記録には、財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色調』を使用した。
5. 本書で使用した方位は座標北である。
6. 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。
溝：SD 柱穴：SP 土坑：SK 不明：SX
7. 現地調査は舞鶴市文化振興課 松崎健太が担当し、吉岡博之、松本達也（同課）の協力を得た。
8. 本書の執筆・編集は松崎が行い、吉岡・松本の協力を得た。
9. 本書に掲載した現地写真、出土遺物写真は松崎が撮影した。
10. 本書に掲載した図面及び記録類、本調査の出土遺物は舞鶴市において保管している。
11. 現地作業については、女布地区の方々に従事していただいた他、調査補助員として真下春美が参加した。
12. 現地調査・整理報告を実施するにあたり、地権者の方々、女布自治会、女布ほ場整備委員会、京都府教育庁指導部文化財保護課、京都府立丹後郷土資料館をはじめ、多くの方々からご協力、ご指導を頂いた。記して感謝いたします。

目次

第1章 はじめに	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 これまでの調査	3
第2章 調査経過	4
第1節 調査経緯・経過	4
第2節 調査区の設定・調査方法	4
第3章 調査結果	6
第1節 検出状況	6
第2節 出土遺物	15
第4章 まとめ	18

図版目次

図版1 調査地遠景写真
図版2 調査地遠景写真
図版3 T1～T6 調査状況写真
図版4 T7～T12 調査状況写真
図版5 T13～T19 調査状況写真
図版6 T20 調査状況写真
図版7 T20～T23 調査状況写真
図版8 T24 調査状況写真
図版9 T24～T26 調査状況写真
図版10 T27～T33 調査状況写真
図版11 出土遺物写真1
図版12 出土遺物写真2、出土木製品写真 (T24・SD1)
図版13 出土種子写真 (T24・SD1)

插图目次

图 1	女布遺跡位置図	1
图 2	女布遺跡周辺遺跡地図	2
图 3	調査区配置図	5
图 4	T1 平面図	6
图 5	T8 平面図	7
图 6	T10 平面図	7
图 7	T13 平面図	8
图 8	T20 平面図	9
图 9	T21 平面図	9
图 10	T22 平面図	10
图 11	T24 平面図	10
图 12	T24 SD1・SK1 出土状況図	10
图 13	T32 平面図	11
图 14	T26 平面図	11
图 15	各調査区土層図 (T1 ~ T10)	12
图 16	各調査区土層図 (T11 ~ T21)	13
图 17	各調査区土層図 (T22 ~ T33)	14
图 18	出土土器実測図	16
图 19	出土木製品実測図	17
图 20	各調査区検出結果	19
图 21	各調査区検出標高比較	19

第1章 はじめに

1. 地理的環境

女布遺跡は京都府舞鶴市字女布に所在する。舞鶴市は京都府東北部に位置し、リアス式海岸が発達した若狭湾の西端に面している。市内中央には湾口から二股に分かれて東と西に深く湾入する舞鶴湾が形成され、湾の周囲には標高 200 m～300 m の急峻な山稜が海まで迫っている。舞鶴市は地勢的に、福井県境の大浦半島を中心とする大浦地区、舞鶴湾東側湾奥に形成された沖積平野を中心とする舞鶴東地区、舞鶴湾西側湾奥に形成された沖積平野を中心とする舞鶴西地区、市域西側の一級河川由良川下流域を中心とする加佐地区の大きく 4 つの地区に分かれている。



図 1. 女布遺跡位置図

女布遺跡が所在する舞鶴西地区は、北流して舞鶴湾に注ぐ伊佐津川と高野川によって形成された沖積平野に広がっている。女布遺跡は平野部南から西方へ入り組んだ高野川の谷筋と、南へ延びる伊佐津川の谷筋の結節点に程近いなだらかな谷平野に立地している。

遺跡周辺は、舞鶴付近から中国山地へ北東から南西方向に貫く「舞鶴帯」と呼ばれる古生代・新生代の地質帯内に位置しており、女布遺跡周辺には古生代の海成層である泥岩や砂岩を中心とする地質構成がみられる。

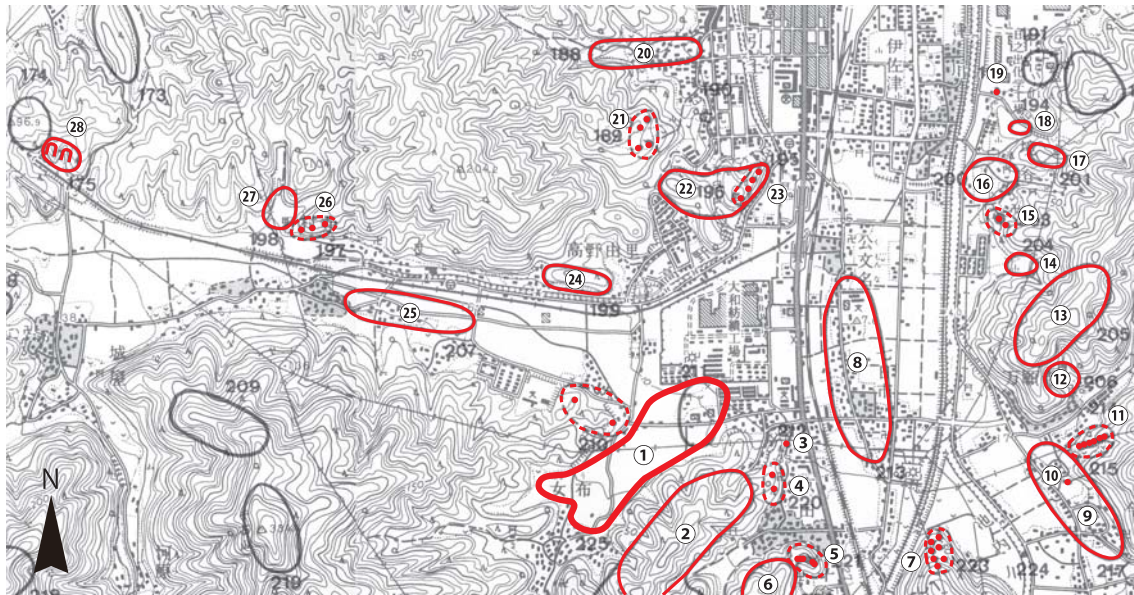
2. 歴史的環境

女布遺跡では今回を含めて過去 4 回の発掘調査が実施されており、弥生時代から飛鳥・奈良時代、平安時代～中世を中心とする遺構が確認されている（文献 3）。遺跡範囲内の下森神社周辺の畑では、個人による表面採集の結果、縄文時代の石器や土器も少量採集されている。縄文時代にも一時期周辺に集落が存在した可能性があるが、調査において縄文時代の遺構は未確認である。以下、周辺の遺跡の状況を概観する。

縄文時代における舞鶴西地区の明確な遺跡は女布遺跡を除いて確認されていない。女布遺跡では、縄文時代草創期の有舌尖頭器 1 点をはじめ、少量の石器や土器が採集されているに過ぎず、実態は不明である。

弥生時代については、女布遺跡で弥生時代中期・後期の住居跡を確認している他、周辺では、⑭菖蒲谷口遺跡（○番号は図 2 に対応）や⑯境谷南遺跡、⑫満願寺跡（隣接地）で弥生土器が採集されている。女布遺跡以外は舞鶴西地区東側の山裾にいずれも分布している特徴がある。なお、台状墓などの墳墓については、周辺では現在のところ未確認である。

高野川流域ではこれ以降の集落遺跡として、古墳時代から平安時代まで続く⑮高野由里遺跡や平安時代の⑰野村寺遺跡がある。城屋集落北側の山腹には、飛鳥・奈良時代の須恵器窯跡であ



- ①女布遺跡 ②女布城跡 ③大角遺跡 ④正勝神社古墳群 ⑤京田丸山古墳群 ⑥京田城跡
 ⑦山崎古墳群 ⑧七日市遺跡 ⑨今田遺跡 ⑩上殿古墳群 ⑪万願寺古墳群 ⑫満願寺跡
 ⑬万願寺城跡 ⑭菖蒲谷口遺跡 ⑮仁寿寺古墳群 ⑯境谷南遺跡 ⑰垣ノ内城跡 ⑱切山遺跡
 ⑲切山古墳 ⑳引土遺跡 ㉑天狗岩古墳群 ㉒引土城跡 ㉓茶臼山古墳群 ㉔高野由里城跡
 ㉕高野由里遺跡 ㉖野村寺古墳群 ㉗野村寺遺跡 ㉘城屋窯跡群

図2. 女布遺跡周辺遺跡地図

る⑳城屋窯跡群がある。また、女布遺跡から東側の平野中央部には奈良時代の⑧七日市遺跡、舞鶴西地区中心部の高野川左岸の谷間には、古墳時代から平安時代の㉑引土遺跡がある。いずれも本格的な発掘調査例がなく、遺跡の実態はよく分かっていない。

古墳の分布については、女布遺跡に面した西側の丘陵に㉕女布大日山古墳群があり、女布遺跡の墓域の一つと考えられる。過去に剣と土器が出土したと伝わるが詳細は不明である。その他、㉗野村寺遺跡に隣接して㉖野村寺（マルコ山）古墳群、引土遺跡の南側に㉑天狗岩古墳群、七日市遺跡の周囲に㉓茶臼山古墳群、④正勝神社古墳群、⑤京田丸山古墳群、⑦山崎古墳群がある。また、舞鶴西地区平野東麓にも散発的にいくつかの古墳群がみられる。中でも⑩切山古墳は、古墳時代前期中葉の組合式石棺が確認されており、この地域における古墳時代前期の首長墳と考えられている（現在、切山古墳の組合式石棺は城南会館敷地内に移設展示されている）。

律令期には、現在の市域は旧加佐郡の大半を占めており、熊野郡、竹野郡、丹波郡、与謝郡とともに丹後国に属していた。その中でも、女布遺跡の位置は田辺郷に属していたとみられる。

飛鳥・奈良時代については、周辺の遺跡数も増え、平野部の各所に集落が営まれたとみられる。特に女布遺跡3次調査で確認された倉庫を含む掘立柱建物群は注目される。柵列で区画し、主軸を揃えて整然と建物が建ち並ぶ状況は一般集落とは考えにくく、地方官衙関連遺構の可能性もある。女布遺跡が地域で中心的な位置を占めていたと想定される。

平安時代には、平野部西側山裾にある圓隆寺が創建されたと伝わり、重要文化財に指定されている平安時代定朝様の阿弥陀如来坐像・薬師如来坐像・釈迦如来坐像の3軀など、数体の平安仏

が伝わっている。その他、女布遺跡東側の丘陵を隔てた京田集落の善福寺にも平安時代の仏像が伝来するなど、寺院や地域信仰の様子が伺える。

鎌倉時代には、平野部東側の⑫満願寺が創建されている。発掘調査の結果、創建に伴う建物跡が確認され、室町時代までの変遷が明らかになりつつある。

中世には各所に山城が築かれている。特に、女布遺跡東側の尾根上にある②女布城跡は舞鶴西地区でも最大級の規模である。近世の地誌類には、女布村の城主として森脇宗坡の名がみえ、細川家の『綿考輯録』には、天正7年（1579）に細川藤孝の攻撃によって一色家臣森脇宗坡が降参したと記されている。女布城の女布集落側に「城坂」などの小字も残ることから、女布集落と女布城が密接な関係にあったと考えられ、中世・安土桃山時代には一定規模の集落が女布地区にあったと想定される。

近世には、舞鶴西地区の平野部中央に田辺城とその城下町が形成される。女布地区も田辺藩の領地の中で、現在の女布集落に続く集落の姿が形成されたと考えられる。

3. これまでの調査

女布遺跡の過去の調査歴は下表のとおりである。

表.1 女布遺跡調査歴

調査 回数	調査 機関	期間	調査面積	検出遺構	出土遺物	報告書
1	舞鶴市	1989.2	約 155㎡	土坑（弥生中期）、竪穴式住居跡 5 基（古墳中期）、掘立柱建物跡 7 棟（古墳末～奈良）、溝	弥生土器、須恵器、土師器	舞鶴市文化財調査報告第 37 集
2		1997.8	約 155㎡	水路（弥生～古墳後期）、柱穴等	弥生土器、須恵器、土師器、木製品	
3		2001.5～8	約 1,500㎡	竪穴式住居跡 17 基（弥生中期～古墳）、掘立柱建物跡 8 棟（飛鳥・奈良）、柵列、土坑、溝等	弥生土器、須恵器、土師器、石器、玉関連遺物等	

第2章 調査経過

1. 調査経緯・経過

平成30年12月、女布地区で計画されている府営圃場整備の範囲に女布遺跡が含まれていることを舞鶴市文化振興課において把握した。直ちに京都府文化財保護課と協議し、同月中に現地の分布調査を合同で実施した。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地として認識されている範囲外にかけて、計画地内の広範囲に遺物が散布している状況を確認し、女布遺跡の範囲及び内容を確認するため、圃場整備に先立って試掘調査の実施が必要と判断した。これを受け、市農林課および女布地区ほ場整備委員会に試掘調査実施の必要性について説明し、承諾を得たため、舞鶴市において令和元年度事業として試掘調査を実施する運びとなった。事業実施にあたっては、文化庁と京都府から補助金の交付を受けた。

令和元年9月、各調査地点の地権者同意が得られたため、10月15日に資機材の搬入・設営を行い、翌16日から重機掘削を開始した。T14、T18、T30については、当初調査区を設定していたものの、重機の進入が困難と判断し、掘削を行わなかった。10月21日から作業員による各調査区の掘削、精査を開始し、順次記録作業を行った。10月25日に京都府文化財保護課から調査状況について現地確認を受けた。

その後、遺構の検出状況を勘案し、11月に調査区の新設（T31～33）や拡張（T24、T26）、一部の調査区の埋戻しを行った。調査区の記録作業が完了し、12月16日に全ての調査区の埋戻しを行った。12月20日に資機材の撤収が完了し、現地調査を終了した。

現地調査終了後、出土遺物の整理作業を実施した。同時に本報告書の編集作業を並行して行い、令和2年3月27日に本書を刊行して事業を終了した。

2. 調査区の設定・調査方法

女布地区で計画されている圃場整備は、南北約400m、東西約600mに及ぶ範囲であり、そのほぼ全域に遺物が散布している状況であったため、計画地全域に30箇所（T1～T30）の調査区を設定した（図3）。調査区は2m×2mの大きさを基準としたが、耕作中の水田では耕作への影響を考慮し、調査区を縮小した。また、遺構が確認できた調査区の一部では調査区を拡張した。

重機の進入が困難と判断した一部の調査区では掘削を実施しなかった。そのため、T14、T18、T30は欠番とする。また、T31～T33は現地調査中に追加で設定した。

調査方法は重機によって耕作土を除去した後、遺構・遺物の有無を確認しながら慎重に掘下げ、遺構面と認識できたところで重機掘削を止めた。その後、人力掘削によって調査区壁面と遺構面を精査し、順次記録作業を行った。検出した一部の遺構では、その時期や性格を把握するため遺構の掘削を行ったが、調査期間や湧水による作業困難、軟弱地盤の影響もあり、検出のみに留めた調査区もある。

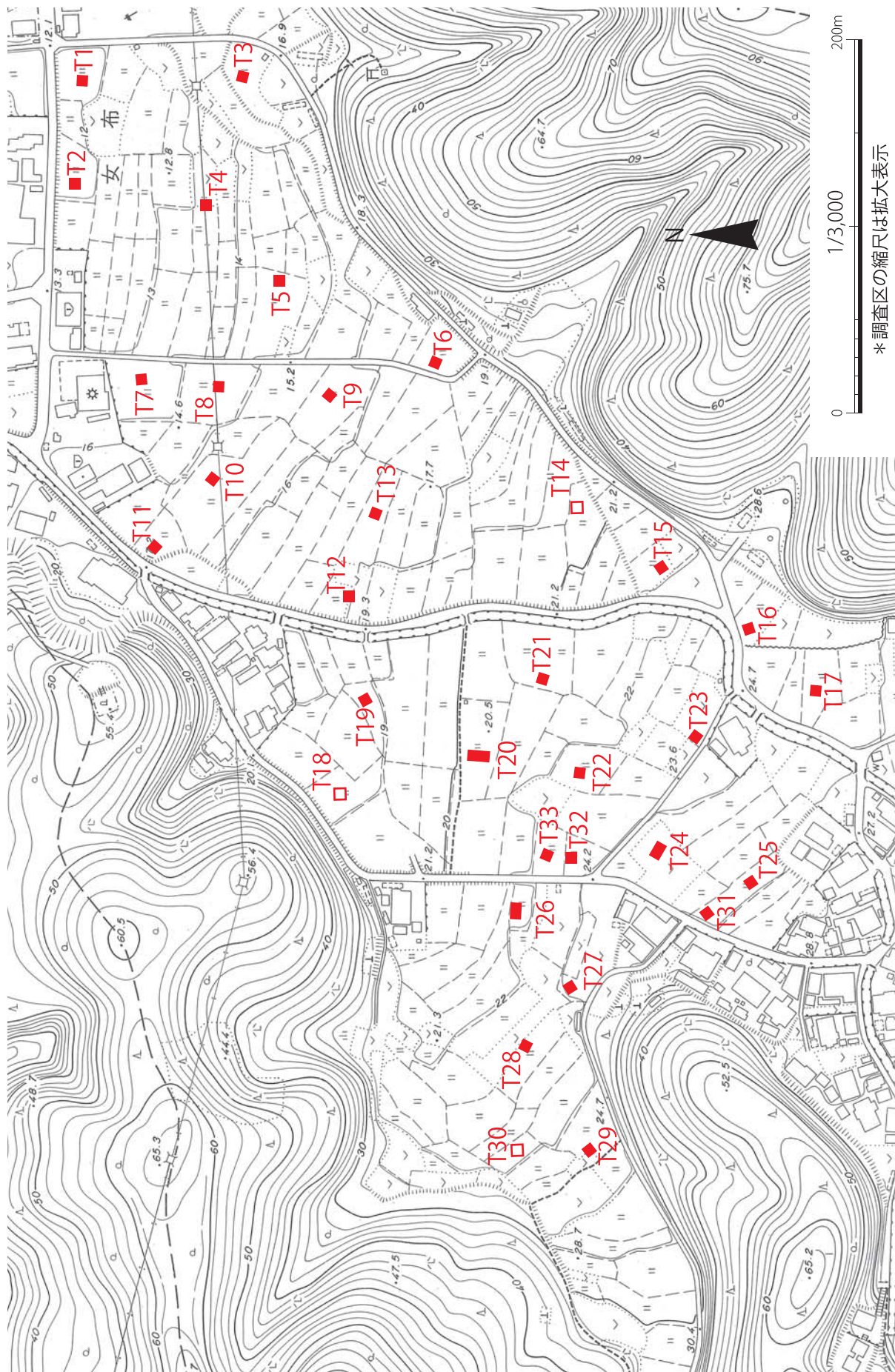


図 3. 調査区配置図

第3章 調査結果

1. 検出状況

以下、各調査区の調査結果を順に記述する。なお、本文中の土層番号(○数字)は土層断面図(図15～17)の土層注記と対応する。

T1

現地表面から約0.65m下(標高約10.85m)で土器片を含む遺物包含層(②③)を確認し、その下層の粘土層(⑥)を基盤とする遺構面を検出した。遺構面の高さは標高約10.5m(現地表面から約1m下)である。柱穴状の遺構も確認できたが、性格は不明である。遺物包含層からは弥生土器片や土師器片が出土している。T1は過去の発掘調査で遺構が確認されている下森神社周辺の微高地に近接しており、関連する遺構群がこの付近まで及んでいると考えられる。

T2

現地表面から約0.7m下(標高約10.95m)で遺物包含層(④)を確認した。下層の⑤は川砂利のような砂礫層で、遺物は含んでおらず、遺構も検出できなかった。遺物包含層には大きな土器片も含まれており、周囲に遺構の存在が推測される。

T3

耕作土直下で固い風化岩の地山を検出した。T3周辺の斜面地はすでに大きく削平を受けている可能性が高い。遺構・遺物は確認できなかった。

T4

③層より下は砂層となり、最下層(⑥)は円礫が混ざる。砂層内には土師器片が含まれていたが、流路による二次堆積と考えられる。遺構は確認できなかった。

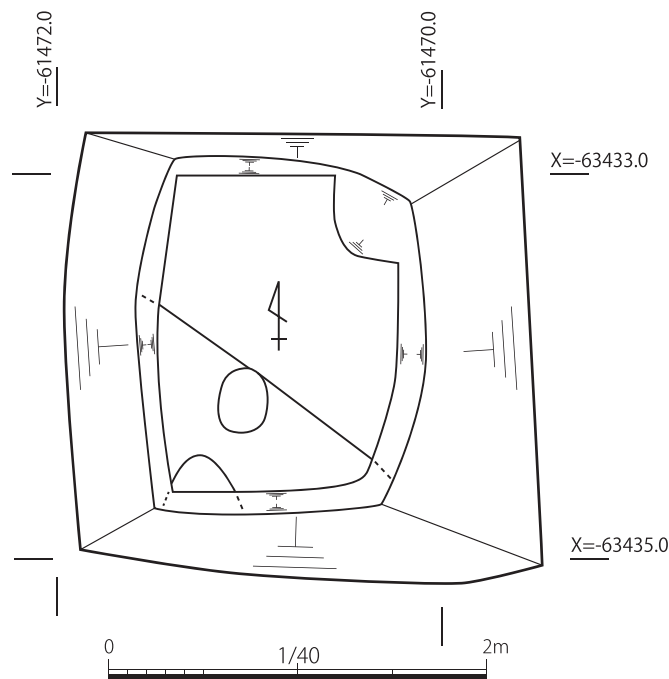


図4. T1 平面図 (S=1/40)

T5

遺構・遺物は確認できなかった。耕作土の下は粘質土層、厚い粘土層を経て④の砂礫層となる。砂礫層はT4と類似する。河川の影響を受けて堆積したと考えられる。

T6

耕作土下は比較的固く締まった粘土層(②)で、さらに下層にも粘土層が堆積している。遺構・遺物は確認できなかった。

T7

耕作土の下は粘質土層 (②) で、その下層の暗灰黄色砂混じり粘質土層 (③) は比較的固く締まった安定した地盤を形成していた。遺構・遺物は確認できなかった。

T8

耕作土と遺物を含んだ旧耕作土と思われる粘質土 (②) を除去すると、現地表面から約 0.5m 下 (標高約 13.3m) で固く締まった褐色礫混じり粘質土層 (③) を検出した。この上面で土器片が多数出土したため精査したが、遺構は確認できなかった。③をさらに掘り下げると、灰色礫混じり粘質土層 (⑤) の上面 (標高約 13.2m) で SX1 (東西 1.3m 以上、南北 0.9m 以上) を検出した。SX1 は深さ 0.1m 程の遺構で、埋土から少量の土師器が出土した。この調査区では出土した遺物量も比較的多く、さらに周囲に遺構が広がっていると推測できる。遺物の年代は 8 世紀を中心としている。

T9

遺構・遺物は確認できなかった。最下層のシルト混砂礫層 (⑤) は、川砂利のような円礫も含んでおり、流路に伴うと考えられる。T4、T5 で確認した砂礫層と共通する流路の存在が想定できる。

T10

耕作土及びその下層の粘質土層を除去すると、炭や遺物を含んだ遺物包含層の黒褐色砂混じり粘土層 (③) を検出した。さらに遺物包含層を掘り下げると、砂混じりシルト層 (⑤) を基盤とする遺構面を検出し、土坑状の遺構を 1 基確認した。遺構面の標高は約 14.3m (現地表面から約 0.8m 下) である。

T11

遺構・遺物は確認できなかった。現地表面から約 0.6m 下 (標高約 14.6m) で風化岩の地山を

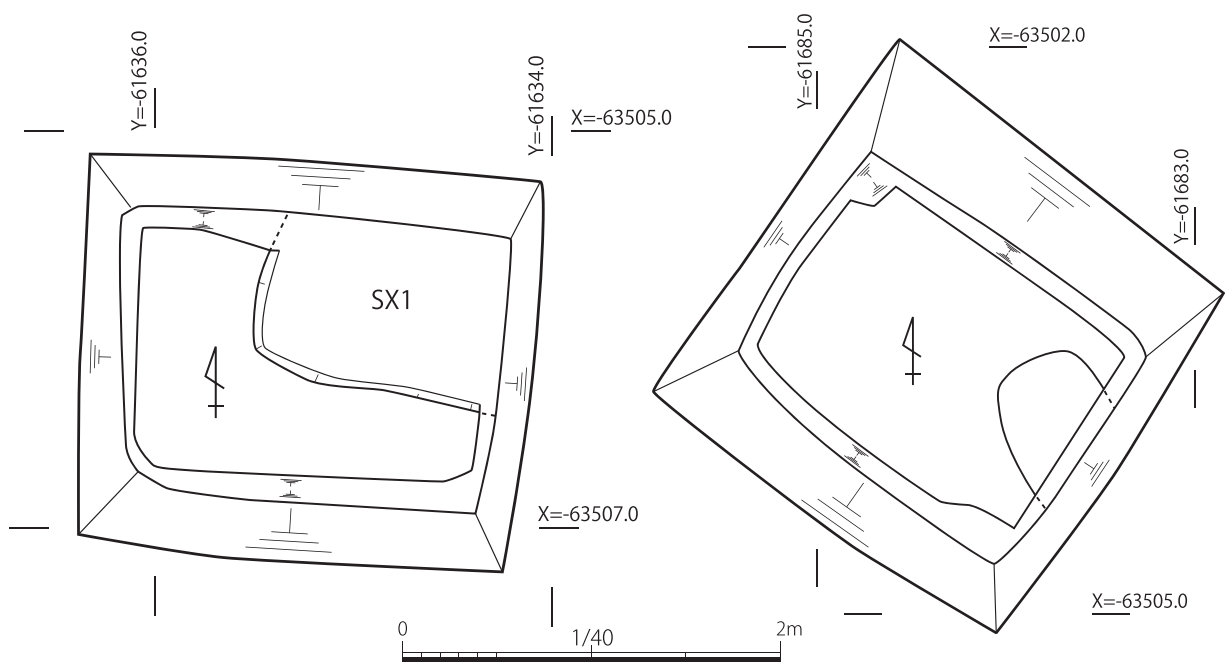


図 5. T8 平面図 (S=1/40)

図 6. T10 平面図 (S=1/40)

確認した。西側の丘陵から続く地山と思われ、山裾付近には遺構が広がっていないことを確認した。

T12

水田床土の下で固く締まった砂礫混じり粘質土層(③)を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

T13

水田床土まで除去したところ、現地表面から約0.35m下(標高16.5m)で砂混じり粘質土層(④)を基盤とする遺構面を確認した。検出した遺構SX1は東側は調査区外に続いているが、長さ約1.6mの不整形な楕円形を呈し、深さは約0.2mを測る。SX1の埋土を掘削すると、底面から径約0.3mの柱穴を検出した。SX1の埋土からは土師器片、須恵器片が出土した。須恵器の年代から古墳時代の遺構の可能性はある。遺構外からの遺物の出土は無く、遺物包含層はすでに削平を受けていると考えられる。

T15

耕作土・床土の下には、砂利混じりの粘質土(④)や、その下層では砂混じり粘土(⑤)が堆積していた。廃土中から須恵器片1点を確認したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

T16

耕作土の下は砂が混ざった緩い粘質土で、その下層では砂礫層(④)を確認した。南側の谷川からの堆積の影響を受けていたと考えられる。遺構・遺物は確認できなかった。

T17

耕作土の下は砂礫が混ざった粘質土で、その下層では砂礫層を確認した。T16同様に南側の谷川からの堆積の影響を受けていたと考えられる。遺構・遺物は確認できなかった。

T19

現地表面から約0.55m下(標高約17.55m)で遺物包含層(③)を確認した。緩い土質の砂礫混じりの粘質土(遺物包含層)が約0.4mと厚く堆積しており、含まれる遺物も摩耗した状況であるため、水流によって二次堆積したような状況と判断した。その下層には固く締まった砂混じりの粘土層を確認したが、遺構は検出できなかった。

T20

現地表面から約0.3m下(標高約19.9m)で、砂混じり粘質土層(⑥)を基盤とする遺構面を検出し、調査区を拡張してその内容確認を行った。北側の一部で遺物包含層(②)が残存しており、②を除去すると南側同様に遺構

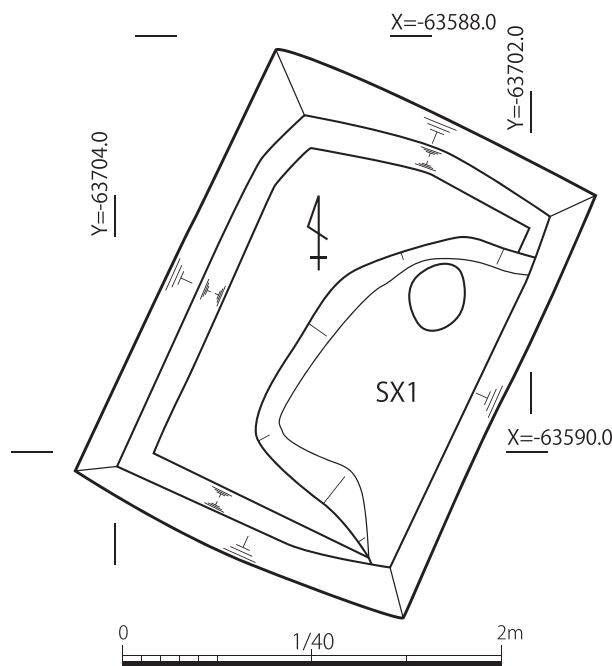


図7. T13 平面図 (S=1/40)

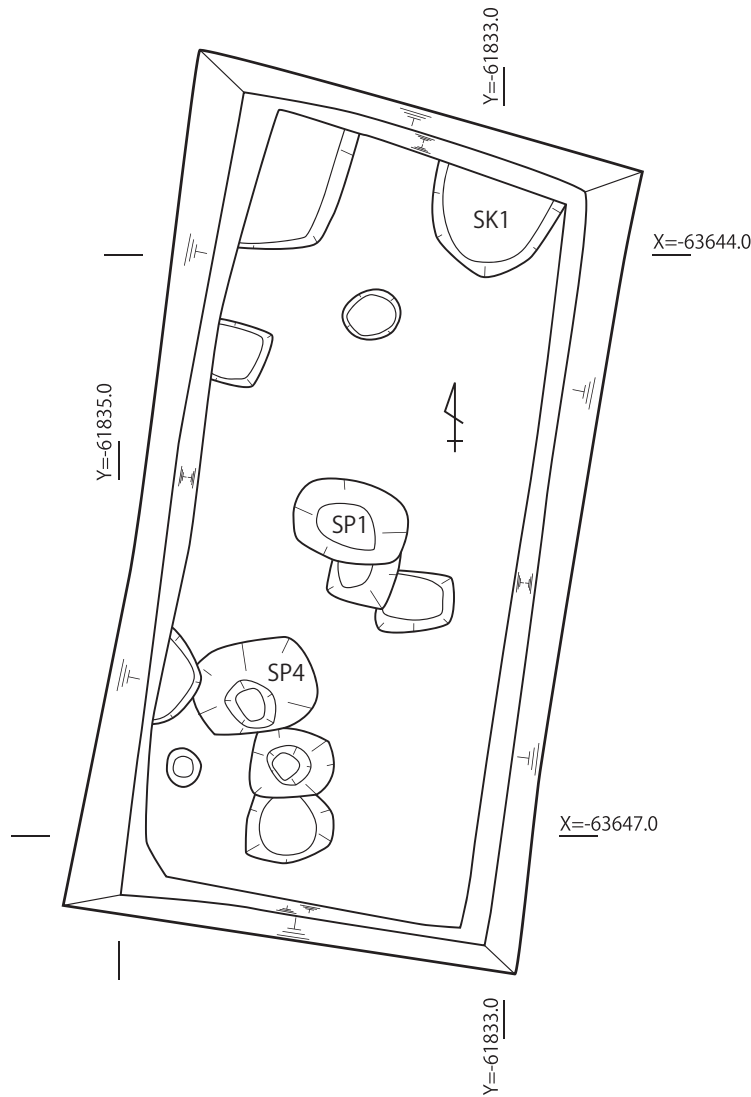


図8. T20 平面図 (S=1/40)

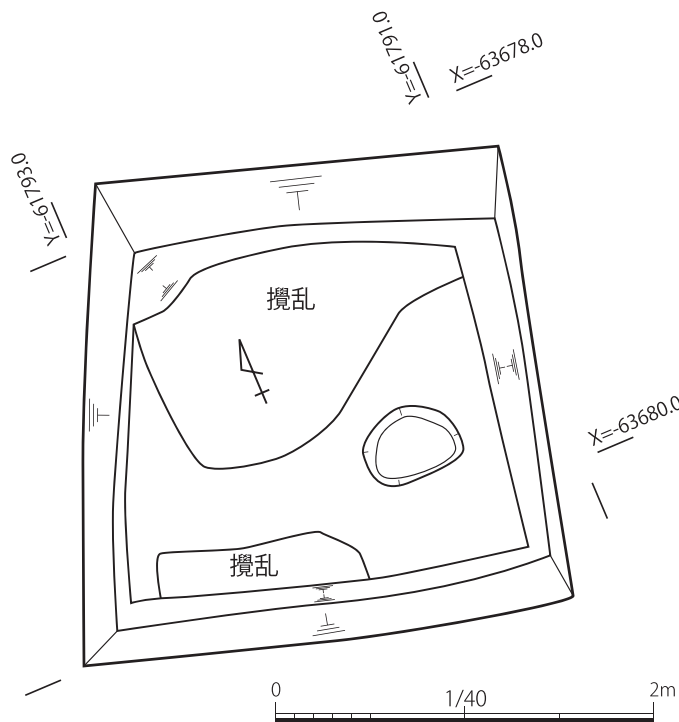


図9. T21 平面図 (S=1/40)

が検出できた。遺物包含層中からは須恵器や土師器が多く出土した。

検出した遺構は柱穴と判断したものが10基、土坑が2基である。柱穴には一辺0.6m～0.3m程の隅丸方形を呈するもの(SP1・4)がある。複数が切り合った状況で検出されたが、調査区内では建物跡として復元はできなかった。柱穴内、土坑内(SK1)からは少量の土器片が出土した。

出土遺物の時期は8世紀代にまとまており、遺構密度も高いことから、周辺に当該時期の遺構が良好に残存している可能性が高い。

T21

現地表面から約0.4m下(標高約19.75m)の砂礫混じり粘土層(⑦)上面で遺構面を確認した。⑦はT20の遺構面基盤層と土質が類似している。遺構面は上層から後世の攪乱を大きく受けており、残存状態が悪い。遺物包含層は残存せず、調査区内で遺物が出土しなかったことから、削平を受けていると考えられる。遺構内埋土に炭が含まれていたが、遺物は出土しなかった。

T22

現地表面から約0.4m下(標高約21.4m)、耕作土直下の砂礫混じり粘質土層(②)上面で遺構面を検出した。確認した遺構は柱穴2基で、埋土内に遺物は無く、時期は不明である。調査区内からは土師器片が数点出土した。

T23

遺構・遺物は確認できなかった。④層に暗渠と思われる掘り込みが確認できた。その下層は砂礫層であり、河川の影響を受けた堆積と考えられる。

T24

耕作土とその下の礫混じり粘質土層を除去したところ、現地表面から約 0.35m 下（標高約 23.3m）で遺構面を確認した。遺構面は固く締まった砂混じり粘土層（⑤）を基盤としており、南側は暗渠のため攪乱を受けてた。

確認した遺構は溝(SD1)と土坑(SK1)である。SD1 は残存部分で幅約 0.4～0.6m、長さ約 1.8m、深さ約 0.15m を測り、調査区外の北東方向に続いている。SD1 の南西側は次第に浅く、幅も細くなり、消失していた。埋土の砂層には炭、大小の木片、種子等、有機物が多量に含まれており、土器類や木製品が出土した（図 12）。木片は溝に並行な状態で埋まっているものが散見され、

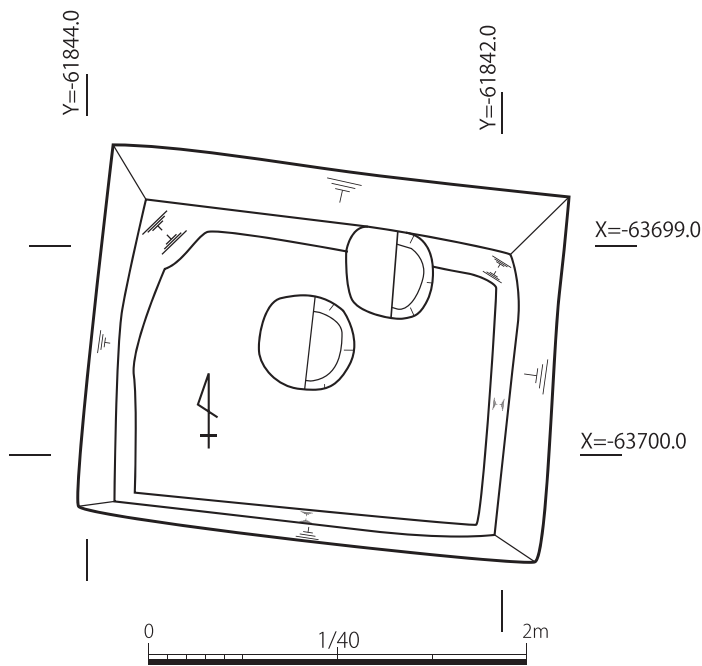


図 10. T22 平面図 (S=1/40)

水流の影響を受けて堆積したと思われる。SK1 は SD1 埋没後に掘り込まれた土坑で、径約 0.4m、深さ約 0.3m を測る。埋土には大量の炭と、木片が含まれており、土師皿等が出土した（図 12）。SD1 および SK1 からは 12 世紀中頃から 13 世紀初頭の瓦器、土師皿、黒色土器等がまとまって出土しており、他の時期の遺物は混入していない。平安時代末から鎌倉時代にかけての集落跡が T24 周辺に広がっていた可能性が考えられる。

T25

遺構面と成り得るような土層は確

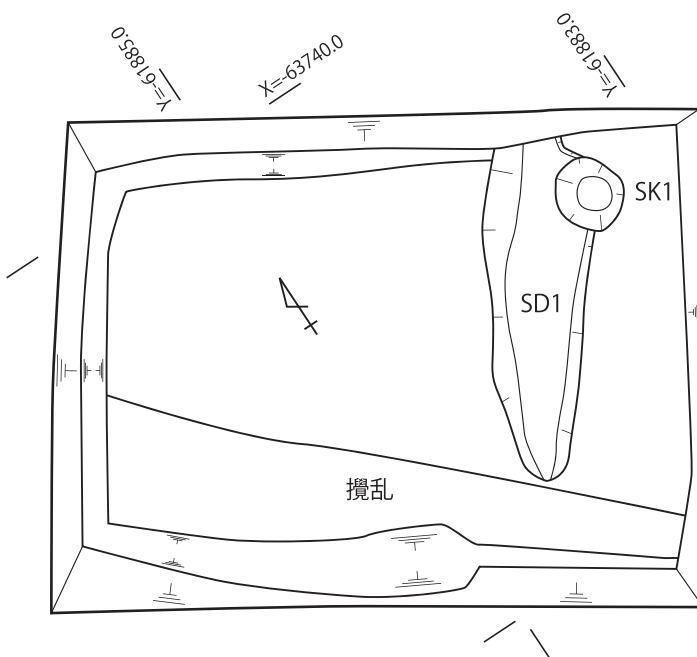


図 11. T24 平面図 (S=1/40)

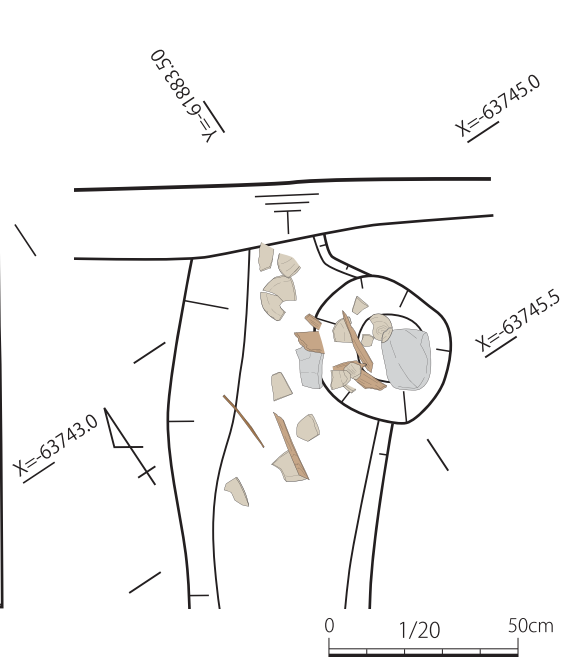


図 12. T24 SD1・SK1 出土状況図 (S=1/20)

認できず、最下層では砂礫層(⑤)を確認した。南側の谷筋からの堆積の影響を受けているとみられ、土質はT23の砂礫層(⑤)と共通する。精査中に弥生土器と思われる土器片1点を確認した。摩滅しており、上流からの二次堆積と考えられる。

T26

耕作土の直下、現地表面から約0.4m下(標高約20.6m)の砂混じり粘質土層(②)上面で遺構を検出した。遺構内からは土師器の小片が出土したが、時期は不明である。②層内にも遺物が含まれていたため、一部を深掘りして確認したところ、さらに下層の粘質土層(④)上面(標高約20.4m)で溝状の遺構を検出し、下層遺構面として認識した。②層及び④層上面からは奈良時代から平安時代、中世にかけての遺物を確認した。

T27

表土を除去すると直下から岩盤が風化したと思われる粘土層を確認した。遺構・遺物は見られず、遺跡の範囲外もしくは削平を受けていると判断した。

T28

耕作土2層の下に、厚い粘質土層(③)と粘土層(④)を確認した。谷の中央付近であり、堆積が厚くなっていると考えられる。遺構や遺

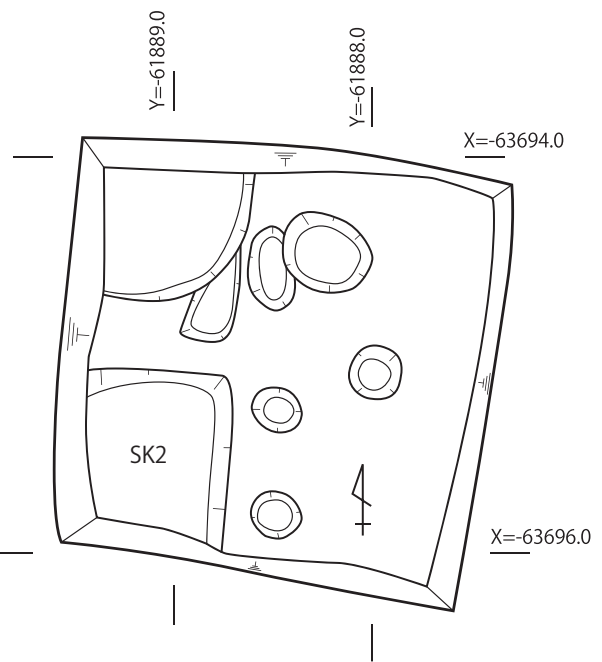


図 13. T32 平面図 (S=1/40)

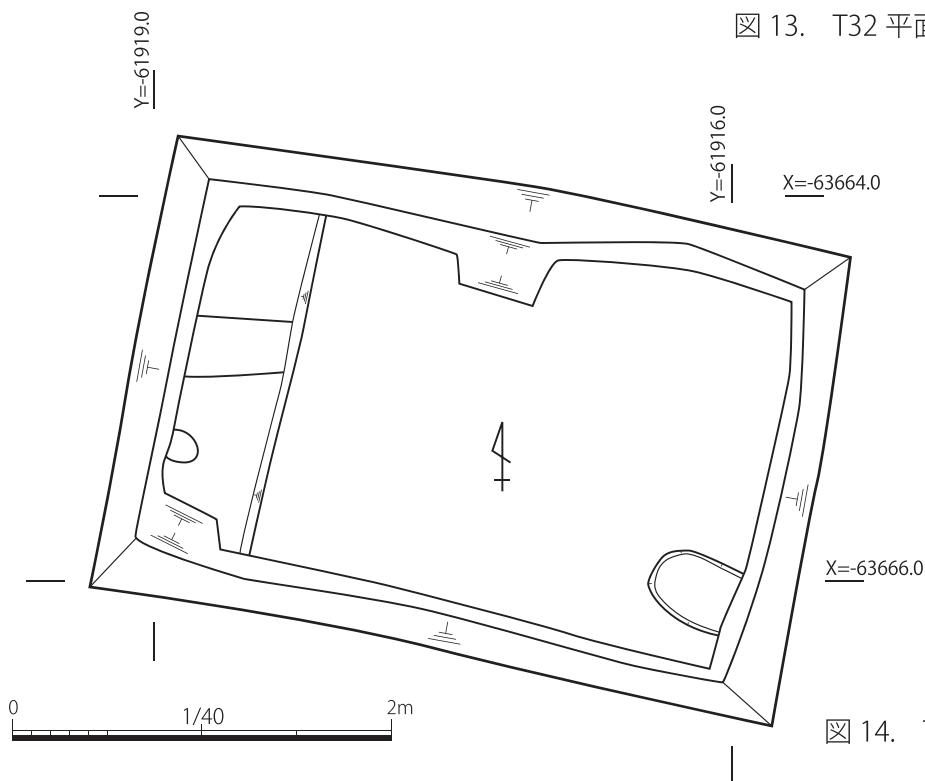


図 14. T26 平面図 (S=1/40)

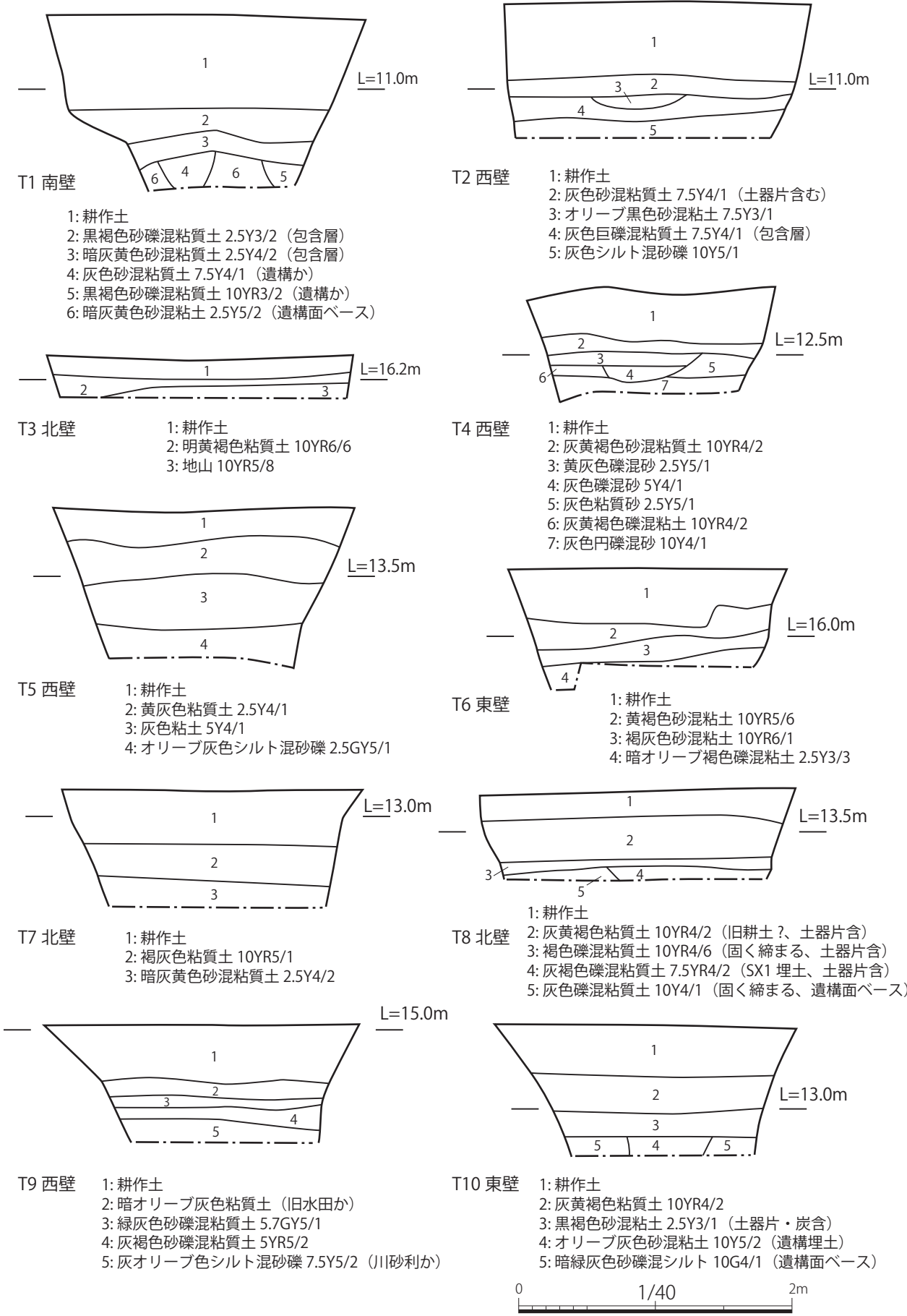


図 15. 各調査区土層図 (T1 ~ T10)

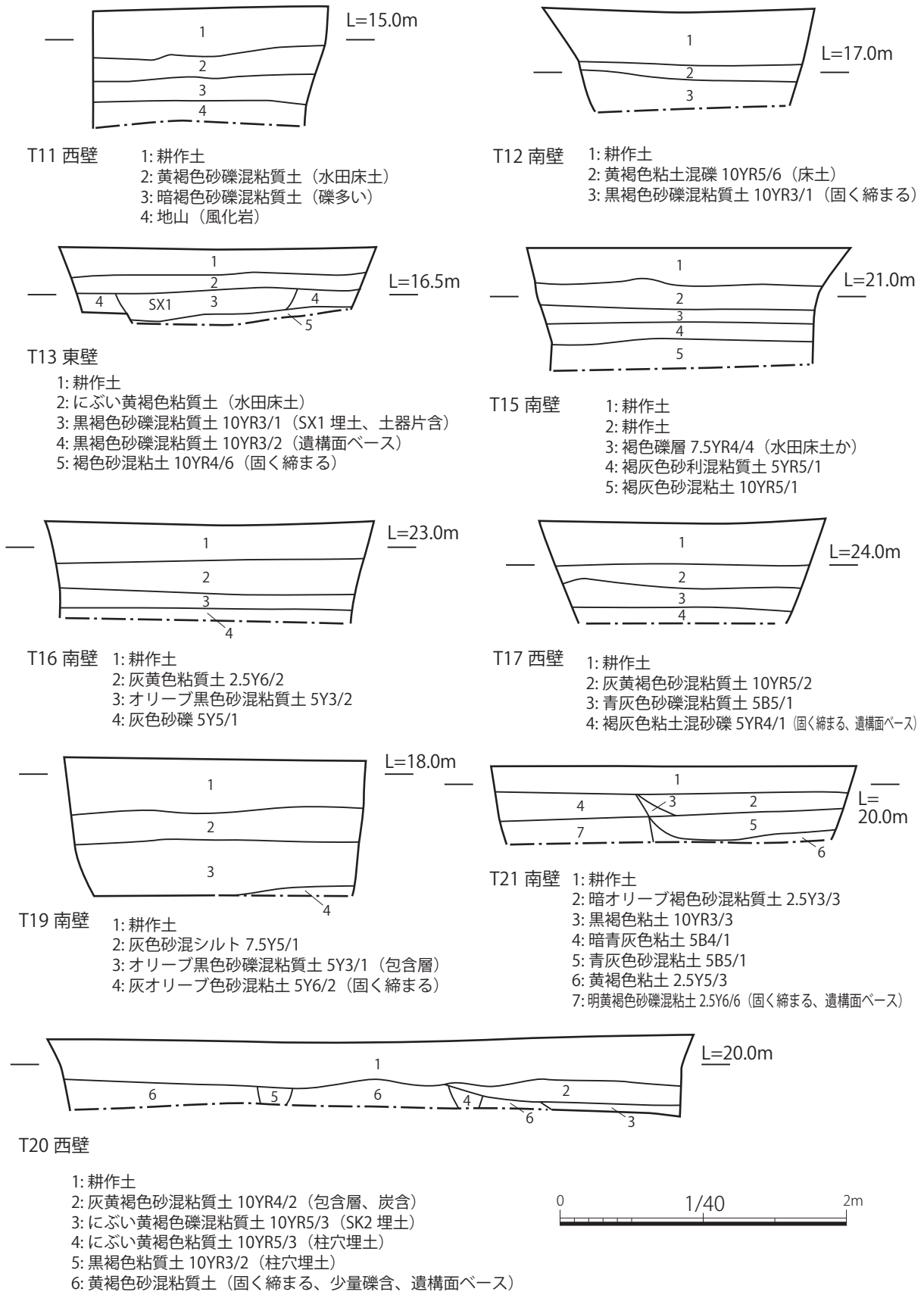


図 16. 各調査区土層図 (T11 ~ T21)

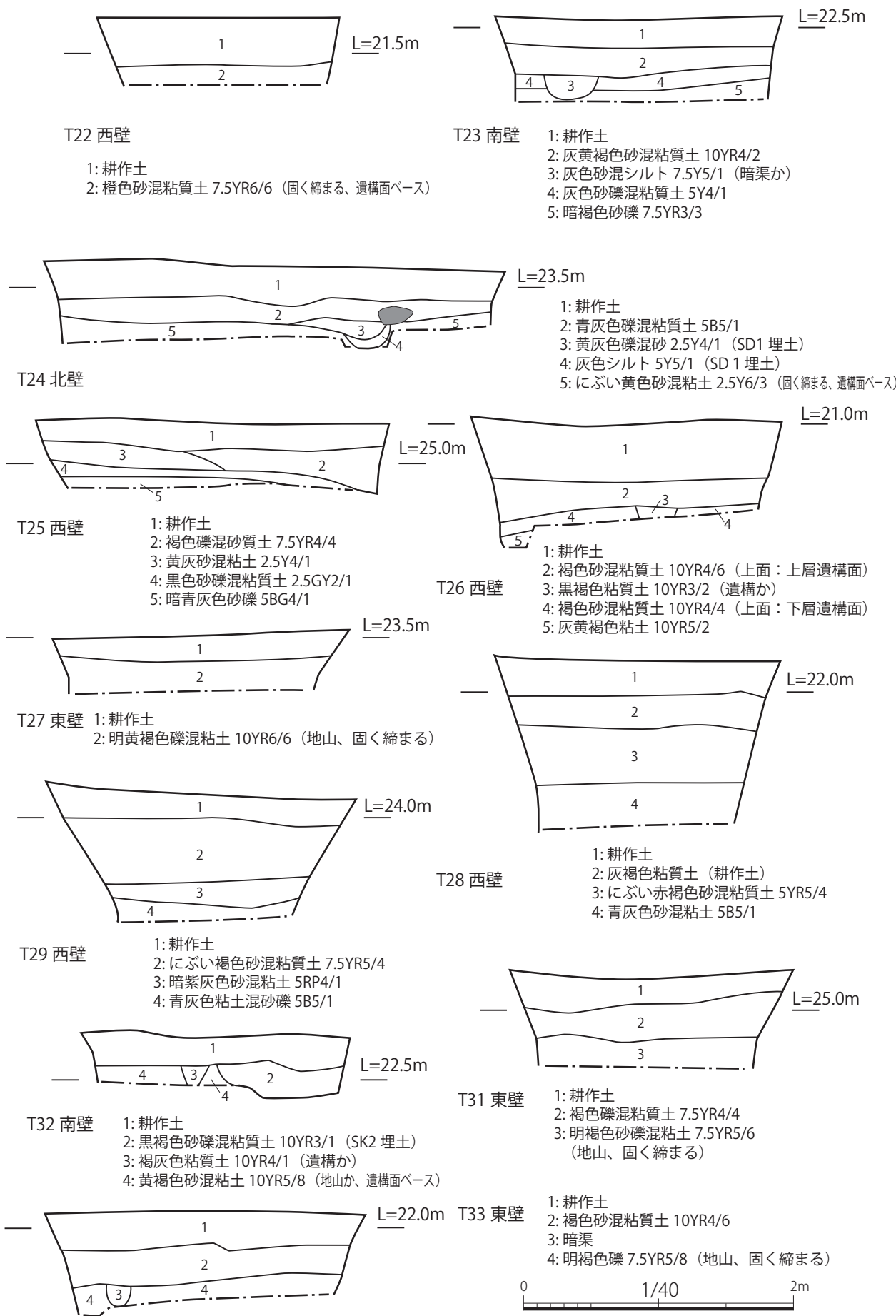


図 17. 各調査区土層図 (T22 ~ T33)

物は確認できなかった。

T29

T28 同様に耕作土の下に厚い粘質土層 (②) を確認した。その下は粘土層 (③) と粘土混じり砂礫層 (④) である。ともに遺構・遺物は確認できず、谷筋の堆積が著しい場所であったと判断した。

T31

耕作土下の粘質土層 (②) を取り除くと地山と考えられる風化岩の混ざった固く締まった粘土層 (③) を検出した。T27 で検出した地山に類似する。遺構・遺物は確認できなかった。

T32

耕作土直下の砂混じり粘土層 (④) 上面で遺構を検出した。遺構面は現地表面から約 0.25m 下 (標高約 22.6m) である。検出した遺構は柱穴状のものが 6 基と土坑 2 基である。土師器片が出土した柱穴もあるが、埋土の様子から後世の耕作に伴う比較的新しい柱穴が混在している可能性もある。土坑 (SK2) からは瓦器片が出土しており、T24 に隣接していることから中世にかけての遺構である可能性が考えられる。

T33

T32 地点の下段の水田に設けた調査区である。表土直下の粘質土の下層 (④) で、暗渠と思われる溝を検出した。④は非常に硬く締まった風化岩の礫層で、地山と判断した。遺構・遺物は確認できず、T32 の検出標高と比較しても、T33 地点ではすでに削平を受けていると考えられる。

2. 出土遺物 (図 18・19、図版 11・12)

今回の調査で得られた遺物は、整理コンテナ 8 箱分ある。T24 の 3 箱を除いて、多くが須恵器と土師器である。以下、調査区順に出土遺物について概要を記す (図 18)。

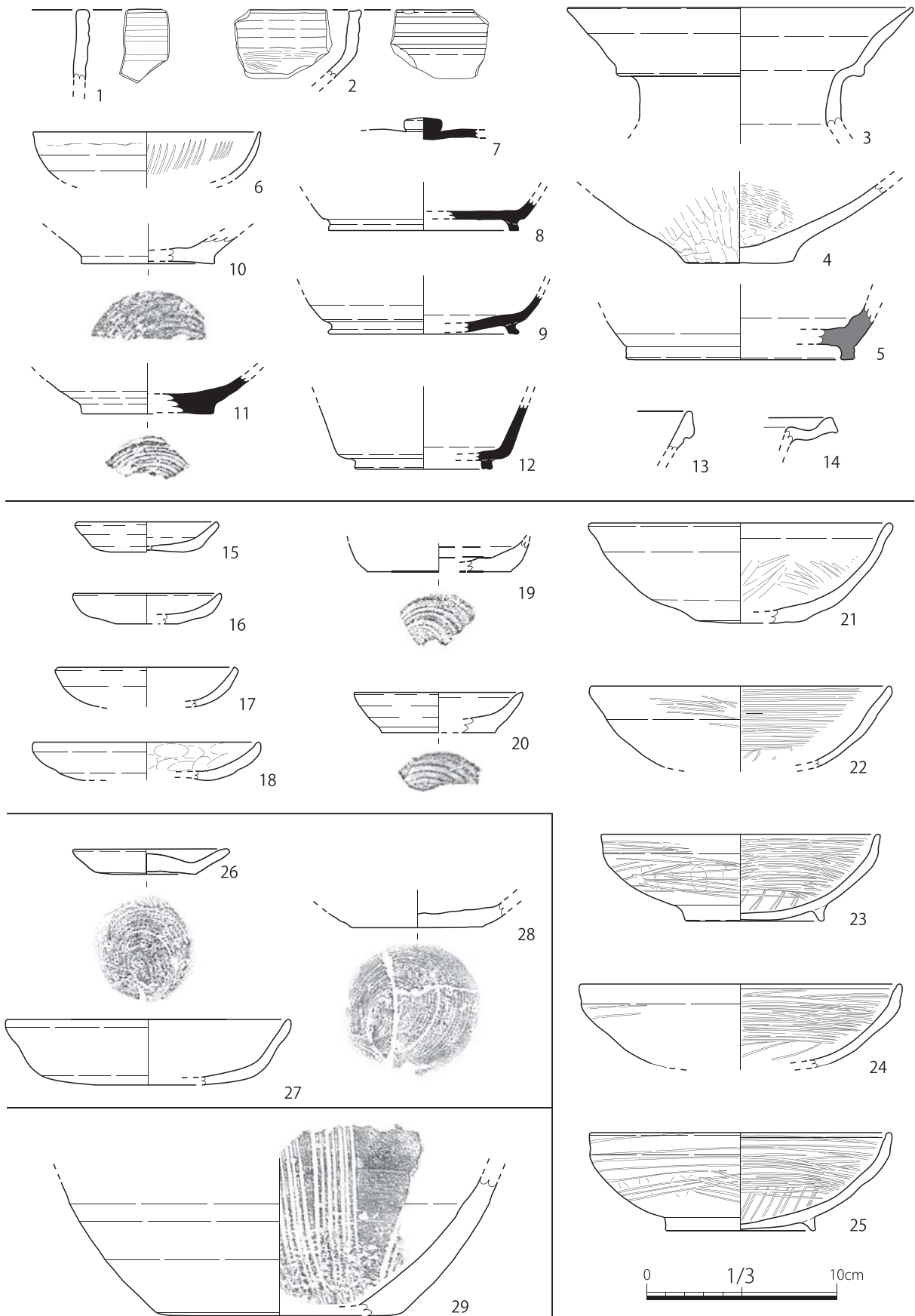
T1 からは 1～3 が出土した。1・2 共に口縁部端部を面取りし、1 は 4 条、2 は 3 条の凹線が外面に施されている。2 は内外に赤彩が残り、高環か鉢片と考えられる。共に弥生時代中期後半に属する。3 は土師器の二重口縁壺である。口径は 18cm を測る。古墳時代前期に属する。

4 は T2 から出土した平底の底部である。外面は丁寧なミガキ調整、内面はハケメで調整されている。弥生土器の可能性もある。

5 は T8 で出土した灰釉陶器壺の底部である。平安時代に位置づけられる。

6～9 は T20 で出土した。6 は SP4 内から出土した土師器の杯である。口径は 11.9cm で、体部外面はヘラ削り、内面に暗文が施されている。7 世紀末から 8 世紀前葉に位置づけられる。7 は須恵器の蓋で、宝珠つまみが付く。8・9 は杯身底部で、貼付け高台が付く。7～9 は共に 8 世紀代に位置づけられる。

10～14 は T26 から出土した。10 は土師器の底部で回転糸切痕がある。平安時代後期のものと思われる。11 は須恵器碗の底部である。回転糸切痕があり、9 世紀に位置づけられる。12 は須恵器杯身の底部である。8 世紀前半に位置づけられる。13 は白磁の口縁部である。玉縁状の



1~3 : T1、4 : T2、5 : T8、6~9 : T20、10~12・14 : T26、13 : T26 付近表採、15~25 : T24・SD1、
26~28 : T24・SK1、29 : T32

图 18. 出土土器実測図

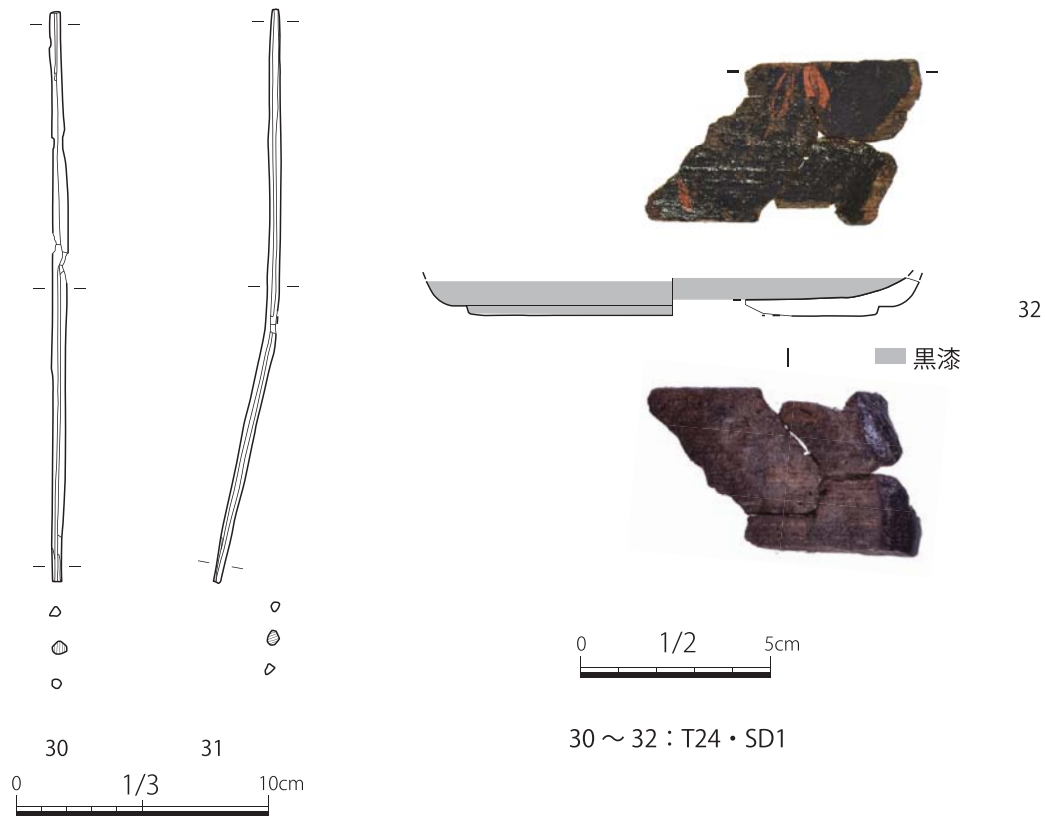


図 19. 出土木製品実測図

端部下端に沈線がある 12 世紀に位置づけられる。14 は瓦器鍋の口縁部である。13 世紀に属すると考えられる。

15～25 は T24 の SD1 から出土した。15～20 は土師器皿である。15 は口径 7.6cm、16 は口径 7.8cm である。17 は口径 9.6cm、18 は口径 14.7cm で共に体部を指オサエとナデ、口縁部を横ナデで調整する。19・20 は底部に回転糸切痕があり、底部から口縁部にかけて比較的短く立ち上がる。SD1 ではこのタイプの土師器皿片が一定量を占めている。20 は口径 8.8cm である。21 は黒色土器碗（内面黒色）である。丹後型と呼ばれる低い高台が付き、底部には回転糸切痕がある。口径は 15.7cm、器高 5.3cm を測る。内面は丁寧にミガキ調整が施されている。22～25 は瓦器碗である。22 は口径 15.6cm で、体部からやや開き気味に口縁部が立ち上がる。23～25 は体部から短く上に口縁部が立ち上がる器形で、24 と 25 は口縁端部内面に浅く沈線がみられる。また、23・25 は外面を密にミガキ調整し、内面は往復して丁寧に描くミガキ調整が施されている。23 は口径 14.6cm、器高 4.6cm、24 は口径 16.7cm、25 は口径 15.6cm、器高 5.2cm である。これら瓦器碗・黒色土器は 12 世紀中葉に位置づけられる。その他、土師皿等の遺物の年代観から、SD1 の年代は 12 世紀中頃～13 世紀初頭頃と考えられる¹。

26～28 は T24 の SK1 から出土した。26 は口径 8cm の土師器皿で、内外面をロクロナデで調整し、中央が強く盛り上がっている。底に回転糸切痕がある。27 は口径 14.7cm の土師器皿である。28 は土師器の底部で、底に回転糸切痕がある。内外面ともにロクロナデがみられる。

SK1の年代は切り合い関係からSD1より新しく、12世紀末頃から13世紀初頭頃と考えられる。舞鶴市内でのT24出土土器の類例としては、由良川沿いの大川遺跡が挙げられる(文献5)。

29はT32から出土した陶器の播鉢である。底部からやや丸く体部が立ち上がり、内面に7条単位の櫛目がやや間隔を空けて施されている。年代観は16世紀頃が想定される。

木製品

T24のSD1より木製品が出土した(図19)。大多数が板状の木片で、一部に木製品が含まれていた。1・2は箸である。1は幅約6mm、長さ約22.6cmである。2は幅約5mm、長さ(歪み有)約22.8cmである。3は漆器皿の底部と思われる。底には削り出しの低い高台が付く。内外共に黒漆塗りで、内面に朱色の漆で葉文が描かれている。

植物種子(図版13)

T24のSD1内からはモモ核(内果皮)が20点出土した。最大の個体で長さ3.1cm、幅2.3cm、厚さ1.8cmを測る。平均値は長さ2.46cm、幅1.82cm、厚さ1.46cmである。その他、トチノキと思われる種子が3点出土した。内2点はほぼ完形で、皮を割った形跡はない。大きさは約3cm×3cmである。

第4章 まとめ

今回の調査では調査区30地点中、10地点で遺構を検出し、遺跡の広がりを捉えることができた(図20・21)。

T1からは弥生時代中期末、古墳時代前期の土器が出土しており、下森神社周辺で過去に確認されている弥生時代から古墳時代の遺構がこの付近にまで及んでいる可能性が考えられる。

他方、女布谷の中央に向かって南西方向から延びる丘陵に続く帯状の微高地に位置するT8、T10、T13、T20、T21、T22、T24、T26、T32でも遺構を検出した。T13のSX1は古墳時代の可能性がある他、T8及びT20は奈良時代の遺物が顕著であり、T20では高い密度で遺構が広がっていた。T26では奈良時代から平安時代、中世にかけての遺物、T24では平安時代末の遺構・遺物を確認した。古墳時代の痕跡は不明瞭ではあるが、奈良時代は微高地の広い範囲で遺構・遺物を確認され、平安時代から中世にかけては微高地斜面上方に遺構・遺物が広がっている傾向が確認できた。微高地の北側と南側はそれぞれ谷奥からの流路が想定できる。

以上の調査結果から、女布遺跡では過去の調査で知られていた女布谷の入り口にあたる下森神社を中心とする弥生時代から古墳時代、飛鳥・奈良時代の集落範囲に加えて、今回の調査で確認した女布谷中央の帯状の微高地の大きく二つの範囲に遺跡が広がっていることが明らかとなった。縄文時代については下森神社周辺で遺物のみ出土しておりその実態は不明ながらも、弥生時代から中世にかけて断続的に集落が営まれていたと考えられる。特に奈良時代の痕跡を今回の調査では広範囲で確認したが、3次調査で検出した倉庫等の建物群との関係性が注目される。

女布遺跡は舞鶴西地区において集落遺跡の全体像が発掘調査によって明らかになりつつある貴重な遺跡であり、この地域の歴史を考える上で重要である。今後の調査研究の進展に期待したい。

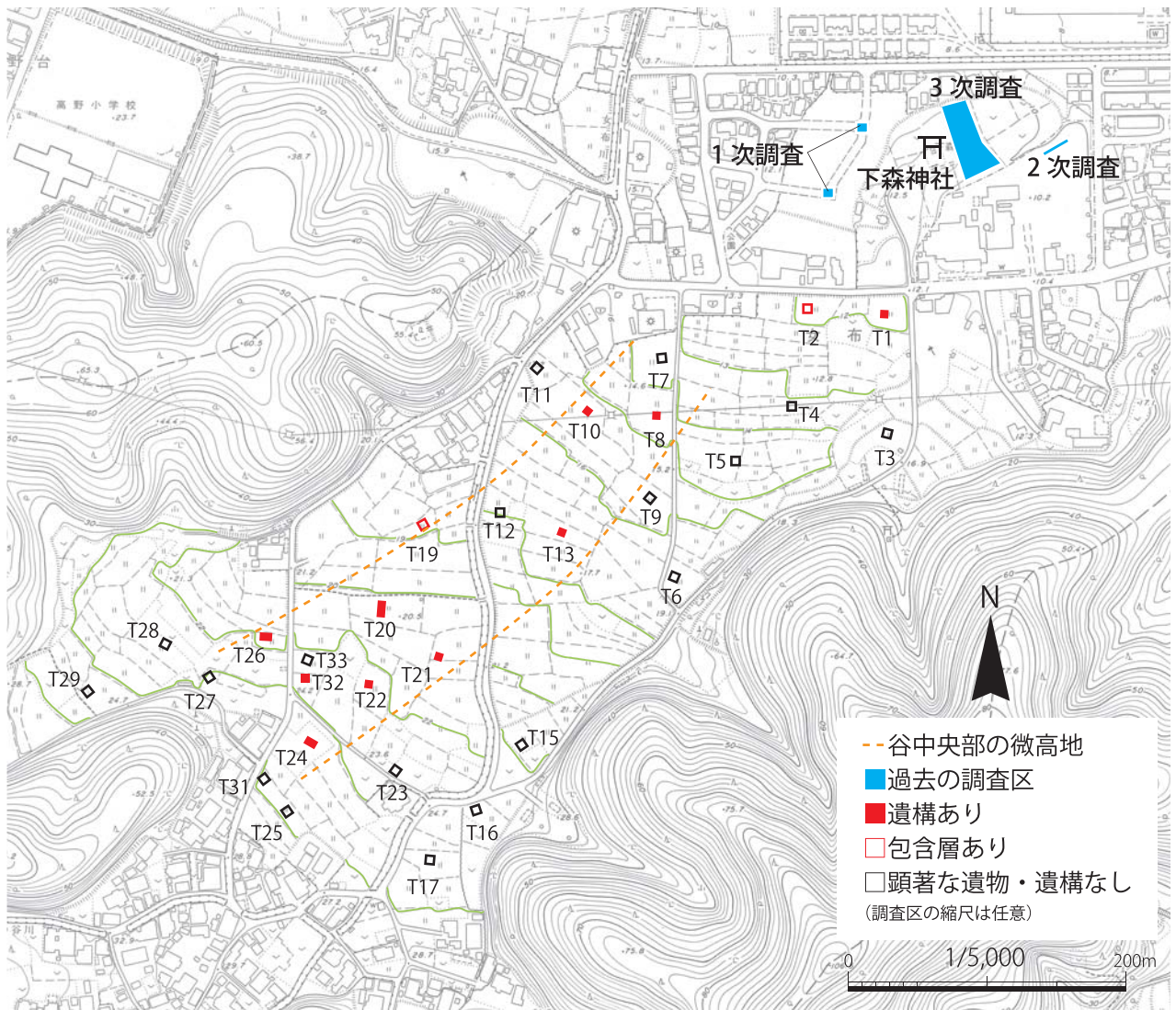


図 20. 各調査区検出結果

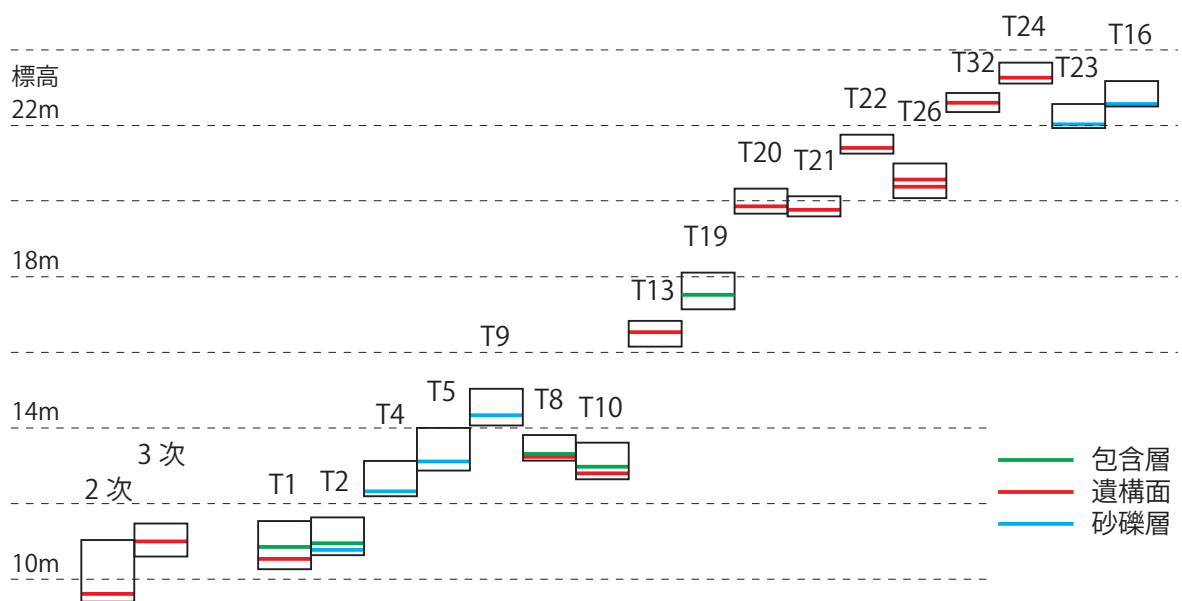


図 21. 各調査区検出標高比較

(注)

1 T24 出土土器については、森島康雄氏（京都府立丹後郷土資料館）に御教示いただいた。

(参考文献)

- 1 舞鶴市史編さん委員会 1993『舞鶴市史・通史編（上）』舞鶴市
- 2 伊野近富 1995「中世土器の編年（上）」『京都府埋蔵文化財情報』第 57 号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 3 松本達也 2002『女布遺跡第 3 次発掘調査概要報告書』（舞鶴市文化財調査報告第 37 集）舞鶴市教育委員会
- 4 小森俊寛 2005『都から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
- 5 伊野近富・竹原一彦ほか 2016「大川遺跡発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 164 冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター

表 2. 掲載遺物観察表

番号	調査区	出土層位等	器種	器形	口径	器高	色調	調整・備考
1	T1	重機掘削	弥生土器	鉢か	—	—	にぶい黄橙 10YR7/3	外面に凹線
2	T1	重機掘削	弥生土器	高坏か	—	—	にぶい褐 7.5YR6/3	外面に凹線、内外に赤色顔料、外面ナデ、内面ハケメ・ナデ
3	T1	包含層（②）	土師器	壺	(18.0)	—	浅黄橙 10YR8/3	ナデ
4	T2	重機掘削	弥生土器？	底部	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	外面ミガキ、内面ハケメ
5	T8	重機掘削	灰釉陶器	壺	—	—	灰白 2.5Y7/1	貼付高台、外面体部ケズリ
6	T20	SP4	土師器	杯	(11.9)	—	橙 7.5YR6/6	外面体部ケズリ、内面ナデ・暗文
7	T20	SK1	須恵器	杯蓋	—	—	オリーブ灰 2.5GY6/1	内外面ナデ
8	T20	②層（包含層）	須恵器	杯身	—	—	灰白 N7/0	貼付高台、内外面ナデ
9	T20	②層（包含層）	須恵器	杯身	—	—	灰 N6/6	貼付高台、内外面ナデ
10	T26	②層上面精査中	土師器	底部	—	—	橙 2.5Y7/6	回転糸切痕、被熱で変色か
11	T26	②層上面精査中	須恵器	椀	—	—	灰白 N8/0	回転糸切痕、内外面ナデ
12	T26	重機掘削	須恵器	杯身	—	—	灰 N6/0	貼付高台、内外面ナデ
13	T26	表面採集	白磁	椀	—	—	灰白 2.5GY8/1	
14	T26	②層上面精査中	瓦器	鍋	—	—	褐灰 10YR6/1	
15	T24	SD1	土師器	皿	(7.6)	1.6	灰黄 2.5Y7/2	内外面ナデ
16	T24	SD1	土師器	皿	(7.8)	1.6	浅黄 2.5Y7/3	内外面ナデ、外面に煤
17	T24	SD1	土師器	皿	(9.6)	—	灰黄褐 10YR6/2	外外面ナデ、外面に煤
18	T24	SD1	土師器	皿	(11.9)	2.0	灰白 2.5Y8/2	内外面ナデ、指オサエ、内面に煤
19	T24	SD1	土師器	皿	—	—	にぶい橙 7.5YR6/4	回転糸切痕、内外面ナデ
20	T24	SD1	土師器	皿	(8.8)	2.1	にぶい橙 7.5YR6/4	回転糸切痕、内外面ナデ
21	T24	SD1	黒色土器	椀	(15.7)	5.3	内：暗灰 N3/0 外：にぶい黄褐 10YR7/2	回転糸切痕、内面ナデ後ミガキ
22	T24	SD1	瓦器	椀	(15.6)	—	灰 N4/0	内面・外面口頸部ヘラミガキ
23	T24	SD1	瓦器	椀	(14.6)	4.6	暗灰 N3/0	貼付高台、内外面ヘラミガキ
24	T24	SD1	瓦器	椀	(16.7)	—	黒 N2/0	内面ヘラミガキ、外面摩耗
25	T24	SD1	瓦器	椀	15.6	5.2	黒 N1.5/0	貼付高台、内外面ヘラミガキ
26	T24	SK1	土師器	皿	8.0	1.3	灰黄褐 10YR6/2	回転糸切痕、内外面ナデ
27	T24	SK1	土師器	皿	(14.7)	3.4	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、外面指オサエ
28	T24	SK1	土師器	底部	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	回転糸切痕
29	T32	遺構面	陶器	播鉢	—	—	灰褐 7.5YR5/2	播目 7 条単位
30	T24	SD1	木製品	箸	—	—	黒褐 7.5YR2/2	長さ 22.6、幅 0.6、厚さ 0.5
31	T24	SD1	木製品	箸	—	—	黒褐 7.5YR2/2	長さ 22.8（折れ有）、幅 0.5、厚さ 0.6
32	T24	SD1	木製品	漆器皿	—	—	黒 N2/0	削り出し高台、内外面黒漆、内面に赤漆で葉文

※（ ）は復元値

圖 版

図版 1



調査地遠景
(北東から)



調査地遠景
(南西から)



調査地遠景
(北東から)

調査地遠景
(西から)



調査地遠景
(北から)



調査地遠景 T28 方向
(東から)



図版 3



T1 完掘状況（北から）



T1 南壁（北から）



T2 完掘状況（東から）



T2 西壁（東から）



T3 完掘状況（南から）



T4 西壁（東から）



T5 完掘状況（東から）



T6 完掘状況（西から）



T7 完掘状況（南から）



T8 検出状況（南から）



T8 完掘状況（西から）



T9 完掘状況（東から）



T10 完掘状況（西から）



T10 東壁（西から）



T11 完掘状況（北から）



T12 完掘状況（北から）

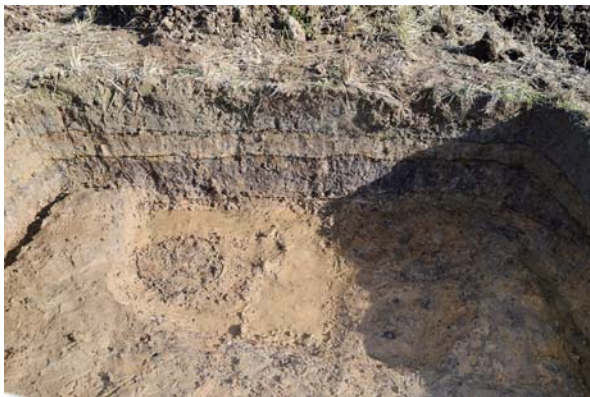
図版 5



T13 検出状況（西から）



T13 完掘状況（北西から）



T13 東壁（西から）



T15 北壁（南から）



T16 南壁（北から）



T17 西壁（東から）



T19 完掘状況（北から）



T19 南壁（北から）

T20 検出状況
(東から)



T20 西壁
(東から)



T20 遠景
(北東から)





T20 完掘状況（北から）



T20 北側検出状況（北から）



T20 柱穴半割状況（西から）



T21 完掘状況（北から）



T21 南壁（北から）



T22 完掘状況（東から）



T23 南壁（北から）

T24 検出状況
(西から)



T24 北壁
(南から)



T24 完掘状況
(西から)





T24 SD1 掘削作業 (西から)



T24 SD1 出土状況 (西から)



T24 SK1 出土状況 (東から)



T24 SD1 完掘・SK1 出土状況 (西から)



T25 西壁 (東から)



T26 検出状況 2層上面 (西から)



T26 完掘状況 (東から)



T26 西壁、3層遺構検出状況 (東から)



T27 完掘状況（西から）



T28 西壁（東から）



T29（南から）



T31 完掘状況（北西から）



T32 検出状況（西から）



T32 完掘状況（西から）

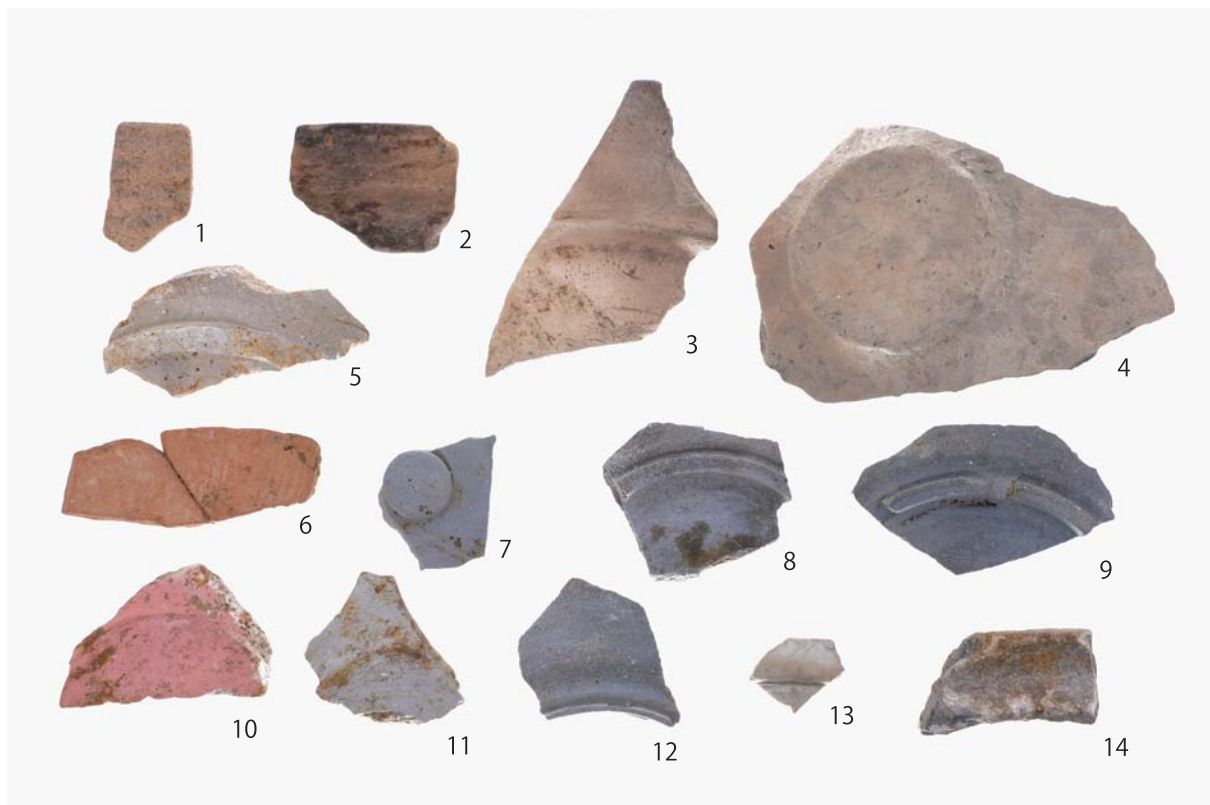


T32 南壁（北から）

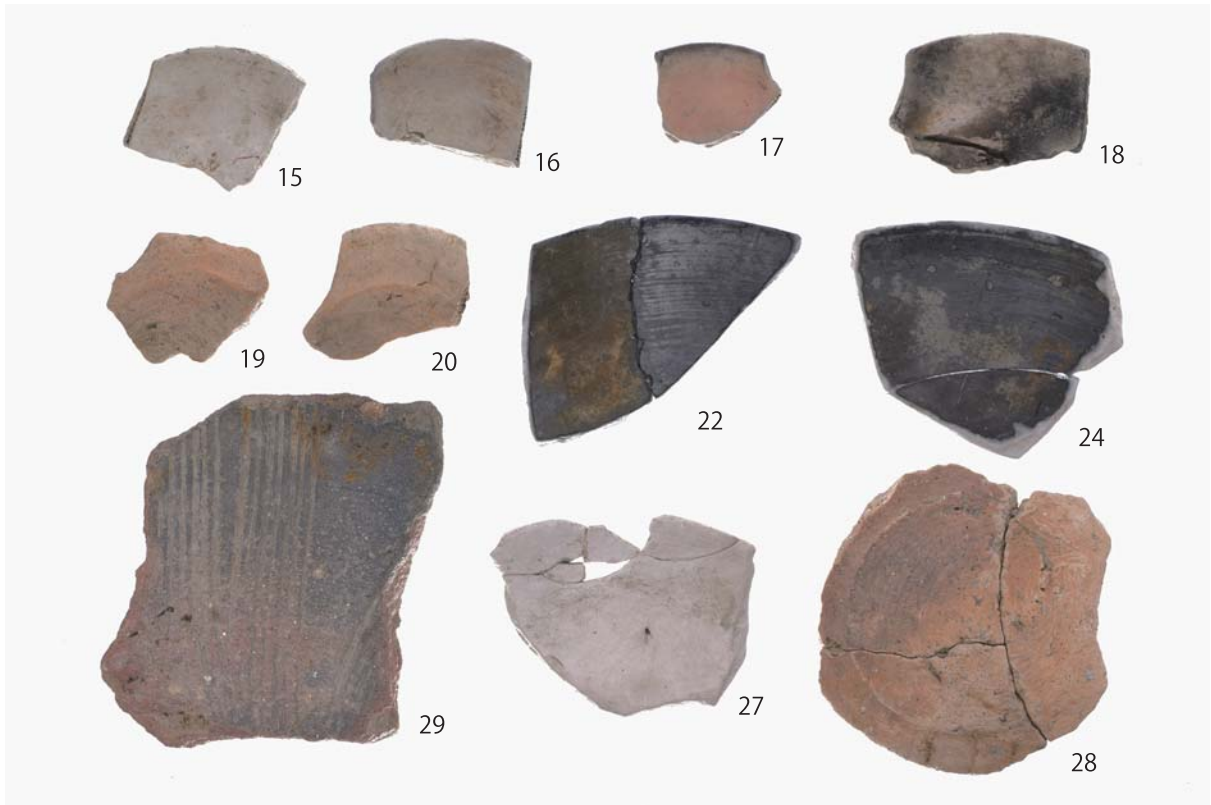


T33 完掘状況（西から）

图版 1 1



出土遺物写真 1



出土遺物写真 2



T24・SD1 出土木製品



T24・SD1 出土種子

報告書抄録

ふりがな	によういせきだい4じはつくつちようさほうこくしょ							
書名	女布遺跡第4次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	舞鶴市文化財調査報告							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	松崎 健太							
編集機関	舞鶴市							
所在地	〒625 - 8555 京都府舞鶴市字北吸 1044 番地							
発行年月日	2020年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
によういせき 女布遺跡	まいづるしあぎによう 舞鶴市字女布	26202	211	35° 25' 30.59"	135° 19' 12.91"	2019. 10.15 ~ 12.20	約 120m ²	範囲 確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
女布遺跡	集落	弥生～ 鎌倉	柱穴、土坑、 溝等		土師器、須恵器、 瓦器、黒色土器、 木製品、漆器皿		遺跡の範囲と内容 を確認した。	

舞鶴市文化財調査報告書第 52 集
女布遺跡第 4 次発掘調査報告書

刊行日 令和 2 年 3 月 27 日
発 行 舞鶴市
〒 625-8555
京都府舞鶴市字北吸 1044 番地
印 刷 株式会社モトキ
〒 624-0816
京都府舞鶴市伊佐津 341